

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第62号 平成21年7月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



山伏山神社と楊梅の木

やまほし  
楊梅の里 白川

玉ほこの道行く人にことつてて

楊梅おくれ白川の人

権中納言定家

須磨の白川周辺には、自生の楊梅の木が多く、その実は昔から珍重され、朝廷に献上されていました。『延喜式』（九二七年）に「諸国貢進菓子、撰津国、楊梅子四担」とあり、白川村の江戸時代の古文書には、京都の禁裏に献上していたことが記されています。また正徳四年（一七一四）、山地の入会権で、長田村などの四カ村と白川村が争ったとき、楊梅献上を根拠に権利を主張したという記録があります。

ただ、藤原定家の歌として『西撰大観』に所収されているこの和歌は、定家の歌集には見つかりません。後世の人が、定家によせて詠んだのではないかという説もあります。楊梅は、白川の大切な産物であり、誇りであったでしょう。

六〇七月に赤紫色に熟す実は、口に含むと独特の香りと甘酸っぱい味がします。今も、白川の山伏山神社周辺には、楊梅の大木が繁っています。

神戸70s 青春古書街図 野村恒彦

(神戸新聞総合出版センター)

七十年代、学生だった著者は探偵小説の虜となり、絶版の本を求めて古本屋巡りを始めた。当時、入手の難しい本を探すには、まめに古書店を回るのが有効だった。ようやく見つけた本を即座に購入する決断力も必要だった。再び出会える保証はないのである。

手に入れたもの、入れ損なったもの、一冊一冊にまつわるエピソードが、それを手にした店の様子とともに語られる。著者にとつて本の思い出は、そのまま書店の、さらには街の記憶と繋がっている。

三十年を経て、書店も街並みもずいぶん変わった。しかしこの本は、古い書物の懐かしい匂いや、かけがえのない一冊との出会いの喜びを思い出させてくれる。



神戸・六甲山のチョウと食草ハンドブック 大塚喜久 今給黎靖夫 清水孝之(ほおずき書籍)

「日本チョウ類保全協会会員」など、自然環境に関わる肩書きをもつ市内在住の著者三人が、小学校高学年から成人までの幅広い読者層を想定して刊行したコンパクトな図鑑。

これまでに神戸市で撮影できた七十九種類のチョウとその食草(幼虫が葉や花を餌にする植物)の写真、概説を収める。食草の写真は、通常、掲載が稀なので大いに役立ちそうである。

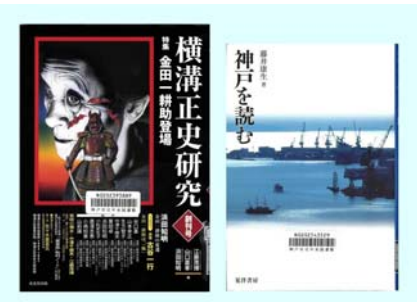
肉体マネジメント 朝原宣治(幻冬舎)

北京五輪で日本人男子初のトラック競技のメダルを獲得した、神戸出身の朝原選手の身体論である。朝原選手は、その時々々の自らの肉体に常に向き合い、コーチの指導も鵜呑みにせず、自分の体の感覚とバランスを大切にしながら反映させたと述べる。また練習を工夫して創造性を発揮することが自己の成長につながったとし、それはどのような道でも通ずるのではないかとしている。

神戸を読む 藤井康生(晃洋書房)

「人が群がるのころに町ができるが、なぜ群がるのか、そこには何があるか」と追及する。その「何か」を追求することが都市論の基礎である、として著者は他の大都市と比較すると歴史の浅い神戸が、六大都市の一つとなりえた「何か」を探っていく。

神戸には、異人館、旧居留地など華やかな観光地がある反面、大震災で露わになった低開発地域や工業地帯もある。また、「神戸市株式会社」の開発と発展の一方で、大洪水、大空襲、そして大震災による破壊の記憶がある。都市ランキングでは常に上位に入る神戸の魅力、その光と影を描いた本書には、素のままの神戸が宿っているような気がする。



横溝正史研究—創刊号 江藤茂博(戎光祥出版)

横溝文学を単なるミステリー研究ではなく、文化やメディアなどの多方面から見直そうとする。

今号の特集は「金田一耕助登場」。恋愛から金銭感覚まで、名探偵の人間像に迫る。また、連載「横溝正史年譜事典」では東川崎町に生まれ、神戸を離れるまでの十九年間をたどる。読書好きの投稿少年の姿が、当時の神戸の様子や世相とともに浮かび上がり、興味深い。インタビュー、論考、寄稿など多彩な誌面。次号が更に楽しみだ。

先見之明—小野富次さんを偲ぶ(小野富次遺稿・追悼集刊行委員会)

昭和四十二年、開港百年祭の一環として神戸カーニバルが開催された。後に「神戸まつり」へと引き継がれたこのイベントを発案したのは、当時、毎日新聞神戸支局長だった小野富次である。

本書は、平成十九年に亡くなった彼の追悼集。同僚や友人たちの寄稿文から、温厚な人柄でいて、ここぞという時は即断即決の活躍をみせた在りし日の姿が伝わってくる。



伝えるー阪神・淡路大震災の教訓

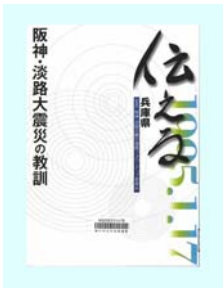
兵庫県編 阪神・淡路大震災復興  
フォローアップ委員会監修 (ぎょう  
せい)

阪神・淡路大震災は史上初の大  
都市直下型の大地震であり、都市  
生活に甚大な被害をもたらした。

本書は、前例のない大災害から  
の復旧・復興の過程で得られた教  
訓を、後世へ伝えるべく編さんさ  
れたものである。

まとめられた教訓は被災者の関  
心事の推移に着目し、「いのち」  
「暮らす」「創る」「支える」の  
四つのテーマに分けて紹介。各教  
訓は、まちづくりや雇用といった  
行政や企業が主体となる大きな事  
例から、心のケアやペットの被災  
といった身近な視点まで多岐にわ  
たり、コンパクトにわかりやすく  
まとめられている。

大震災後も、日本各地で自然災  
害が多発している。体験に基づく  
実践的な教訓は、多くの人の参考  
になるだろう。



不登校の子どものための居場所と  
ネットワークーネットワークを活か  
した支援とは 兵庫県不登校研究会  
(学事出版)

全国に十数万人在るといふ不登  
校の子どもたち。現在、官民間わ  
ず多くの支援活動が行われている。

本書はフリースクールや親の会  
など様々な例を紹介。また、すべ  
ての子どもにも効果のある活動はな  
いことから、性質や理念の異なる  
多様な団体をネットワークでつな  
ぐことで、一人ひとりが最適な環  
境と出合う手助けが出来るのでは  
ないかと提案。インターネットや  
懇話会を通じた先駆的な取り組み  
も紹介している。

黒と赤の潮流 福田和代(早川書房)  
二年前、交通事故でスプリン  
ターとしての選手生命を断たれて  
以来、祐一の心は冷えきったまま  
だ。そんな彼のもとに刑事が訪れ  
遊び仲間のドゥアンが殺されたこ  
とを告げる。真相を探ろうとする  
祐一の前に、ドゥアンの父親だと  
いう男が現れた。

震災から半年経った神戸を舞台  
に、それぞれ心に空洞を持った男  
たちが繰り広げる熱い冒険小説。

|| その他の新刊 ||

古書往來 高橋輝次 (みずのわ出  
版)

賀川豊彦を知っていますかー人と信  
仰と思想 阿部志郎ほか (教文館)

震災のためにデザインは何が可能か  
hakuodo+design studio-L (NT  
T出版)

神戸市バリアフリー道路整備マニ  
アル 神戸市建設局道路部編 (神戸  
市建設局道路部)

書庫探訪 その⑱

『神戸英国領事館の裁判記録』

明治初年、外国人の法的紛争は領事裁判で処理されてきました。領事  
裁判とは、領事が駐在国の自国民に対し本国の法にてらして裁判をおこ  
なうという制度です。英文、手書きのこの資料は、1871 (明治4) 年9  
月から1872 (明治5) 年11月までの神戸のイギリス領事館の裁判記録で  
す。民事事件、刑事事件、警察事件にわけて記述され、実際の領事裁判  
を知るうえで貴重な資料となっています。このなかには、訴訟の当事者  
や証人として、居留地の設計者ハートや神戸レガッタ・アンド・アスレ  
チッククラブの創設者シム、六甲山の開祖グループといった著名な人た  
ちの名もみうけられます。

1年あまりの裁判記録ですが、様々  
な事件を通じて当時の商取引の実態や  
居留地社会の様相が浮かびあがってき  
ます。さらには、居留地の外国人の生  
き方さえも垣間見ることができます。  
翻刻と邦訳やいくつかの事件を解説し  
た資料が出ています。



深江文化村

芦屋川河口近くの西側、神戸市東灘区深江南町にかつて洋風建築の邸宅が建ち並んだ一角がありました。

深江文化村と呼ばれるこの地域（芦屋文化村ともいう）には、大正から昭和初期にかけて欧米人が多く居住し、国際色豊かなコミュニティを形成していました。

本庄地域は海に面した立地が好まれて、明治後期から大正の頃には別荘や邸宅が多く見られるようになりました。深江文化村以外にも深江の海岸沿いに昭和五年に洋風の滞在型アパート「文化ハウス」が、芦屋川河口の東には昭和六年に洋風貸し別荘「三宜荘」が建てられ、休暇を過ごす欧米人が滞在し、砂浜での海水浴や社交生活を楽しんでいました。

大正期には全国各地で生活改善運動がさかんになり「文化」をキーワードに様々な改良が行われました。大正十一年に東京・大阪で開催された住宅博覧会に出品された建物が「文化住宅」の基準となり、そうした住宅による住宅地が「文化村」と

呼ばれるようになったのです。

深江文化村の土地は、地主であった医師から提供を受け、建築家吉村清太郎が全体設計を行いました。吉村は、メンソレータムや神戸ユニオン教会（現フロインドリーブ）の設計で有名なヴォーリズの建築事務所勤務したことがあり、その影響を受けていました。

深江文化村の全体の面積は約二千五百坪、中央に約四百坪の芝生庭園を置きその周囲に十三棟の西洋風住宅が配置されました。吉村自身の設計による住宅がまず大正十三年に完成し、その後外国人建築家を含む複数の建築家による住宅が次々建設されました。

この内の一軒にロシア革命で国を追われたピアニスト、アレクサンドル・ルーチンが居を構えると内外の音楽家たちがしばしば訪れるようになり、芸術家村的な雰囲気が強くなりました。

ルーチンの門下生の一人、神戸生まれの大澤壽人は、米国留学後作曲家となり神戸女学院の教授に就任しました。大澤は四十六才で亡くなりましたが、最近になって再評価されています。

ルーチンを慕って訪れた音楽家たち

の一人がヴァイオリニスト、ヴェクスターでした。貴志康一は、甲南高校在学中よりヴェクスターに師事してその才能を伸ばし、ヨーロッパへ留学後ベルリンフィルを指揮するまでになりましたが、二十八才の若さでこの世を去りました。

また、貴志康一の友人で東京に本拠を置くロシア人ピアニストのレオ・シロタも、愛娘ベアテを伴ってこの地を訪問しました。ベアテ・シロタは後にアメリカに留学し、終戦後GHQの一員として日本に戻り、日本国憲法に女性の権利を盛り込むことに尽力した女性です。

この他にも、ロシア人音楽家に会うために山田耕作、近衛秀麿、竹中郁、小磯良平ら日本人音楽家・芸術家たちが文化村を訪れています。しかし、昭和七年にルーチンが亡くなった頃から、つかの間の平安を楽しんでいたロシア人たちの上に戦争の影がさしてきます。

昭和十年に指揮者メッテルが、宝塚歌劇のダンス教授であったオソフスカヤ夫人と共に文化村に移り住み、朝比奈隆・服部良一らに教授していました。彼が昭和十四年に日本を去った後、文化村の音楽的風景は姿

を消してゆくのです。

文化村の住宅は、戦災、バブル期、そして阪神淡路大震災を経て失われていきました。各邸が広い敷地を持っていたこともあって、それぞれが建売住宅群やマンション、駐車場に姿を変えました。

現存している二邸のうち、F邸はロシア人建築家のラディンスキーが設計した切妻屋根の木造住宅です。ラディンスキーは、神戸居留地の明海ビルに設計事務所を構えていましたが、F氏も同じビルに商店を開いていた縁で設計を依頼したそうです。

T邸は大正十四年にアメリカ人の設計で日本人大工が建てた、現存する日本最古のツーバイフォー住宅です。先代が鈴木商店のシアトル支店に勤務したことがあり、その生活スタイルを持ち込んだものようです。この二邸は国の登録有形文化財となっており、深江文化村のかつての面影を今に伝えていきます。

参考図書

- 『本庄村史 歴史編』本庄村史編纂委員会
- 『阪神間モダニズム』「阪神間モダニズム」展実行委員会 ほか